

エアメモの起源

科学航空博覧会

「科学航空博覧会」は昭和33年（1958）3月20日から4月30日まで50日間、鹿屋航空隊内で開催された。

この博覧会の目的は、航空科学の重要性と産業科学の技術の全容を、広く内外に紹介、展示するとともに、併せて地方産業の振興と文化の向上を図ると『鹿屋科学航空博覧会誌』に記載されている。

また、趣意書は次のとおりである。

我が国の産業は、戦後急速に進歩を遂げ、文化の進展とともに航空科学についても、偉大な発展を見てきた。しかしながらいまだに世界各国の水準にも及ばぬ現状である。

鹿屋市は九州の南端に位置する大隅地域の中心都市で、戦時中は本渡最南端の第1の航空基地として幾多の特攻機が発進した土地である。戦後は新しく生まれ変わった国土防衛のための海上自衛隊鹿屋航空基地の設置を見るに至り、戦前、戦後を通じて、つねに航空とともに生きてきたのである。

今日航空隊の施設の整備を拡張し、国営笠之原畑地かんがい事業の推進、国鉄国分線の新設工事などの飛躍な発展を遂げつつある。ここにおいて航空科学についての理解と知識を広め、その発展に寄与するために「科学航空大博覧会」をも要すことに決定した。

しかし単にこれが航空科学のみならず、それらに関する一連に基礎産業の振興と合わせ、県下三山稜の一つである吾平山稜など、歴史的な幾多の由緒ある史跡地、古墳群を有する辺境の地、大隅を広く紹介して、これらの科学的開発にも資せんとするものである。（以下略）

会場は、航空隊内の一部、およそ30ヘクタールを借りたが、これは永田鹿屋市長が航空隊の生みの親だということがわかったため許可されたということである。その上、航空隊に飛行機、そのほか航空関係の機械や器具も展示して、隊員が親切に説明に当たってくれた。

また防衛庁をはじめ、通商産業省、全国の諸官庁、各種団体、新聞社などの協力や後援があり、鹿児島県と鹿屋市が共催で、まことに大がかりな博覧会であった。

経費も2億円に達し、地方での催しとしては珍しいことであった。

開会式には高碓通商産業大臣、寺園県知事、そのほか多くの名士が祝辞を述べたが、永田会長はその式辞の中で、前記の趣意書の要旨を強調し、大隅開発を訴えたのである。

博覧会の内容は航空館、航空機展示場、電気科学館、車両館、宇宙館、電信電話館、産業館、農機具館、水族館、物産館、郷土館、子供の国などのほか、野外ステージ、海女実演場、アーチ、テーマ塔、広告塔、売店、休憩所など、建物だけでも3,000坪に及んだ。

第2会場では落下傘の降下演習、曲芸飛行、ジェット機及び海上自衛隊の諸機器類が展示され壮観であった。ちょうどこの博覧会の最中に鹿屋飛行場で第4回アジア大会の聖火の受渡式が行われ、永田市長が第1走者として聖火を掲

げて走り、塩田助役がこれに続いた。また闘牛大会とか、NHKののど自慢、そのほか演芸の催し物が毎日行われて、観覧客を喜ばせていた。

入場者は、17万6千余を数えたというから、一応は所期の目的は達せられた。

閉会式で塩田助役は、次のように述べた。

永田市長は、国の内外の情勢を洞察し、大局に目を注ぎ、将来に大きな夢を描きつつ、郷土大隅の飛躍的な発展のみを日夜念頭におき企画している。この博覧会は永田市長でなければできない模様市であります。(以下略)

鹿屋航空隊と永田良吉

永田良吉衆議院議員が、ヒコーキ代議士と呼ばれていたことは、政界や軍部、また民間でも有名であった。このことは氏が県会議員から代議士、また鹿屋市長の時代と、40年間を通じて名実ともにいえることであろう。

特に代議士のころの官報には、一名「請願代議士」とも呼ばれていたほど飛行機に関する請願が多い。また、国会での飛行機に関する名演説も多い。

昭和33年(1958)、永田良吉に、海上幕僚長から感謝状と金一封が贈られた。このときの鹿屋航空隊から海上幕僚長への、感謝状贈与に関する上申書の一部を記しておこう。

「功勞の大要」

- 一 国防と航空の重要性は、その生活を通ずる信条であり、戦前は国会議員として10余年の久しきにわたり、鹿屋航空隊と鹿屋海軍工廠の誘致、拡張整備に専念し、東亜に君臨する大航空隊を完成しその功大なりとして、佐世保鎮守府司令官から、航空に関する感謝状を受けたことがある。
- 二 終戦に伴い、アメリカ軍の進駐を見るや、鹿屋市長として、鹿屋航空隊保全のために尽力し、これがため施設を完全に確保した。
- 三 警察予備隊が創設せらるるや国会議員として、軍国主義の再興などとあらゆる非難を排除し、その誘致にまい進し、鹿屋部隊の駐在を確保した。
- 四 海上自衛隊の設置を見るや、現鹿屋航空隊の設置に全力を傾注し、さらに滑走路の拡張に当たっては、地主はもちろん、革新団体のあらゆる反対の説得に努め、円満なる解決を見るに至ったのは真にその功績によるものである。
- 五 鹿屋航空隊発足後も、航空隊のために協力し、その成果は甚だしいものがある。
- 六 いままた科学航空大博覧会を開催し、科学の重要性と、航空防衛、航空交通の緊急性を一般に認識せしめるなど、実にその功績は大なるものがある。(以下略)

前各項のとおり、現在鹿屋航空隊が整備されたことは、地元のもの大であり、日常積極的な援助については、隊員はもちろん、隊内もひとしく感激するところである。

出典：鹿屋市史